

Title	松山先生と私
Author(s)	財津, 愛象
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 63-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88749
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

松山先生と私

財津愛象

大正十二年三月三十日午前九時、大阪驛に着いた私は、思懸けなく、西村、松山兩先生の御出迎を受けたのである。久振りに御目に懸つた嬉しさよりも、まづその厚き御情に感泣したのである。馴れぬ土地に來た私は、兩先生より種々御注意を戴いたのであるが、その時松山先生は莞爾として、『君とは餘程縁があると見えるね』と一笑せられた。實に私が先生の御指導を受けるやうになつてからも、随分久しいもので、今又懷徳堂で御世話になることになつたのだから、これは随分深い縁と言はねばならぬ。明治三十六年四月、私は廣島高等師範學校に入學した。其の時漢文の授業を擔當せられたのが、松山先生であつた。フロツクコートを着て、徐に壇に上られた第一の印象は、今なほ眼底に新に残つて居る。教科書は第一高等學校教員編纂の漢文讀本で、第一時限に講義を承つたのは嚴先生祠堂記であつた。先生は謹嚴な口調を以て嚴先生の高節を説かれた。次が周濂溪先生の愛蓮説であつた。先生はまづ濂溪先生の思想を詳述して、その文を講じ、すべて文章を味ふ前にはその時代とその作者とにつ

いてよく調べた上でなければならぬことを教へられた。先生は常に文章の段落に就いて注意せられた。大段小段皆それ／＼の意義關係を明にして、一篇の構造を知らしむるに努められた。一々段落を切つてキチキチきめてゆく、これはまた一面先生の性格を物語るものであつて、その講義振は懇切丁寧を極めたものであつた。其後支那文學史漢籍解題馬氏文通等を講せられた。文通には大分力を入れて、西洋の文典と一々比較して了解を確實ならしめんと力められた。先頃私が助辭の用法に就いて少し調べて居た時、先生は笑ひながら、『あの時の馬氏文通が生きて來たのか、随分嫌はれたものだが』と笑はれた。實際面倒な馬氏文通は、當時の學生には餘り喜ばれはしなかつた。併し先生は文字の位置さへ誤り勝ちであつた我々に、諄々としてその法を説かれ、時には古今の名文を暗誦せしめ、背書せしめて、一々丁寧とその誤謬を訂正し、讀書作文の力を進むるやう指導せられた。

かつて先生の御宅に伺つた時、先生は易經の索引をこしらへて居られた。經書を読むにはまづ索引を完成せしむることが第一の急務であることを説かれた。私が不完全ながら四書の索引をこしらへたのも、先生の言に刺戟せられたからであつた。去年十二月、助字研究のことを耳にせられて、詩經が濟んだら易をやるのも面白からうと、わざわざ大部な索引を懷徳堂まで御自身に運んで貸與せられた。その謄寫がまだ私の手で濟まないうちに、先生は遂に逝かれたのである。廣島卒業の後、私は熊本縣に赴任した。その後も教科書に、屢不審が出る度に手紙を以て先生に教を請うたことは一再ではなか

つた。先生は常に熱心に懇篤に教示の勞を吝まれなかつた。其後廣島に於て國語漢文中等教員の講習會が開かれた時、先生は漢籍解題を講義せられた。現今の中等學校の教師が、單に一時を糊塗して、根本的研究に興味を有せざること就いて、深く遺憾を感じて居られたので、その弊を救はうとの心から、特に此の題目を選択せられたものらしく考へられる。其の後私はまた廣島高等師範學校附屬中學校に教鞭を執ることになつた。こゝで私は再び親しく先生の教を請ふことを得たのである。間もなく國語漢文學部の生徒の旅行があつた。その時の引率者は先生で、私はその補助として御伴することとなつたのである。年は忘れたが時は冬季休暇であつた。大阪京都奈良芳野、私等は冬枯の名所古蹟を歩いた。旅行といへば春か秋かに定まつて居るが、冬の古蹟めぐりは又格別の趣がある。花や紅葉の飾を捨てた眞の面目は、冬に於て始めて見ることが出来るぞ申されて、蕭條たる山野の趣を殊に愛せられた。其後私は京都に遊んで、暫く御使りも怠勝ちであつたが、大正十二年春から、懷徳堂講師として、又御指導を仰ぐことゝなつたのである。考へて見れば、私が先生に師事したことも久しいものであつた。が私は先生に就いての、逸事逸話といふやうなものを知らない。この逸事逸話が無いといふことが、一面から見れば、先生の先生たる所以である。私は何人が先生の傳を作るも、必ず特筆すべき文字は恐らく温厚謹嚴の四字であらうと思ふ。先生の日常の行動は、すべてこゝから生れて居る。如何なる場合にも疾言遑色せらるゝことなく、靜かに落ついて萬事を處理せらるゝ誠心誠意は、先生

に接するものをして、渴仰の念を起さしめずにはおかぬ。これは實に學と行と、融合混和して築き上げられたる人格の方である。さるにてもこの先生の下に在りながら、自ら磨くこと能はざる自分は、顧みて忸怩たらざるを得ぬ。先生の御逝去を悼むとともに、深く自ら愧づる所である。

永田理事長と松山教授を憶ふ

稻 束 猛

昭和二年に入つて我が懷徳堂は先づ理事長永田仁助翁を喪ひ、其後任未だ定まらぬに、又教授松山直藏先生を失つた。頻々と不幸が續く年である。

永田理事長は人も知る大阪實業界の重鎮であつて、平生極めて多忙らしかつたが、よく健康に留意して居られたと見え、懷徳堂に來られても常に元氣で若々しかつた。よく人から健康長壽に就いて聞かれたりすると、何時でも無雜作にそして例の翁一流の平易な調子で『別にこれといふこともしませんがネ、唯毎朝四時か五時に起きて築港の潮湯に浴して歸るのを日課にした位なものです』といつて居られた。長壽に就いては『心配をするといふ事が一番いけない様に思ひます、自分が浪速銀行の頭